

三谷恵子

ジェヴァド・カラハサン

Dževod Karahasan

一九五三年、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの町ドゥヴノ（現在の名称はトミスラヴグラード）に生まれた作家、詩人、文学研究者、演劇家である。両親ともにイスラーム教徒のボスニア人だが、本人はユーゴスラヴィア時代のボスニアの多文化環境の中で教育を受け、サラエヴォ大学文学部を卒業した後、ザグレブ大学（クロアチア）で演劇論に関する博士論文によって学位を取得した。一九八〇年代から創作活動を始め、舞台芸術に関わるとともに詩や小説を発表し、サラエヴォ大学などで文学を講義してきた。一九九三年、戦闘の激化したサラエヴォを離れ、ザルツブルク、グラーツなどを中心にオーストリアおよびドイツの大学で客員教授を勤めた。現在はグラーツに居をえて執筆活動を行いながら、サラエヴォ大学で文学を講じている。主要作品は、九世紀のスーフィー派殉教者アルハラジを主人公にした『東方詩集』（一九八九年）、ユーゴフ

裂下で戦争状態に置かれたサラエヴォを内部から描いたエッセイ風の小説『移住の日記』（英訳は *Sarajevo, Exodus of a City*）（一九九二年）、二つの名前で登場する一人の女性を通して戦時下のサラエヴォを語る『サラとセラフィーナ』（一九九九年）、ボスニア戦争が始まった当時のボスニア東部の町フオチャを舞台に展開する『夜の評議会』（二〇〇五年）、移住・共生・アイデンティティといったテーマの中・短編をまとめた『暗い国からの便り』（二〇〇七年）などがある。最近はまだ、演劇活動にも熱を入れている。訳出した本編は、上記の『暗い国からの便り』に含まれるもので、この作品自体は、本編のほかに『悲しみの解剖学』、『ガブリエル・プリンツィプ』、『カール大帝と悲しい象たち』の、それぞれ独立した五編からなるアンソロジーである。

『一九九三年の手紙』は、「私」と旧友のボグダンが、一九九五年にザルツブルク駅で再会するエピソードから始まる（なお、作品中ではボグダンという友人について個人的なことは何も語られないが、「ボグダン」というセルビア人に多い名前、またボグダンの語りの部分のみ、ボスニアクロアチア語とやや

異なるセルビア語が用いられていることから、ボグダンがセルビア人であることが推測される。語る「私」はおそらくサラエヴォ出身のボスニア人である。ボグダンのエピソードから、「私」の語りはさらに、自分が教えるザルツブルク大学の文学講義の話題に移る。「私」は大学でハリスというサラエヴォ出身の学生と出会うが、授業に熱心だったハリスがある時突然姿を消し、半年後、パリから「私」宛てに封書が届く。中にはハリスの手紙のほかに、見知らぬ人の書いた二通の手紙が同封されている。その一つは、モーリッツ・レーヴェンフェルトという男性が妻にあてた手紙で、そこには彼と父パウル、そしてパウルとその父つまりモーリッツの祖父マックス・レーヴェンフェルトとの複雑な関係が記されていた。そこに引用される祖父の手紙から、そのマックス・レーヴェンフェルトが、じつは、イヴォ・アンドリッチ（一八九八—一九七二、ノーベル文学賞作家）の初期の短編『一九二〇年の手紙』（一九二〇年）に登場する「マックス」であることがわかる。このアンドリッチのマックスの手紙を引用しながら、カラハサンはアンドリッチとは異なるボスニア——アンド

リッチが描いた「差異とそれが生み出す憎悪」のボスニアではなく、「差異とそれが生み出す、憎悪すれすれの調和」のボスニアについて語る。祖父マックスの過去を再生させたモーリッツは、戦下のサラエヴォに赴くことを手紙で妻に告げる。ハリスから「私」に送られたもう一通の手紙は、おそらくモーリッツの妻アンドレアが友人に書いたもので、その手紙にはモーリス（モーリッツ）がサラエヴォで死亡したこと、アンドレアもまたサラエヴォに、モーリスの真の意図を説明しに出かけることが記されている。そして、これらの手紙を同封したハリスもまた、自らボスニアの現実を生きるために、激戦下のサラエヴォに赴くと「私」に告げる。

「私」とボグダン、「私」とハリス、モーリッツと父パウロ、パウロとその父マックス、モーリッツと妻、さまざまなる形の愛情と信頼で結ばれた人々の対話を同心円状につなげながら、カラハサンは自らのボスニア像——憎悪と対立だけでもなく、団結だけでもない、差異が微妙にバランスをとって人間関係を支えている多彩なボスニアを描き出す。作品中に現れる「団結

「*bratstvo*」という言葉が、ティトのユーゴスラヴィア時代の国家スローガン「友愛と団結」の「団結」であることが印象的である。